

『ハワーズ・エンド邸』の「英国性」

岡 山 勇 一

1

『ハワーズ・エンド邸』(*Howards End*, 1910)はその出版直後の書評、並びにその後の多くの批評論文等から判断して、E. M. フォースター (E. M. Forster) の六つの小説の中では『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924)とともに最高傑作だと言えそう¹⁾。こうした見方を確定したのはL. トリリング (Lionel Trilling) の有名な研究書、『E. M. フォースター研究』(*E. M. Forster*, 1944)である²⁾。この書物によってフォースターは同時代の大作家であるジョイス (James Joyce) やウルフ (Virginia Woolf) 等と同列の扱いを受けるに相応しい作家としての地位を確立出来たと言える。

フォースターがそのような扱いを受けるようになった最大の理由は、彼が大英帝国の衰退期への突入という当時の時代状況を真摯に受けとめ³⁾、当時の英国社会とそこに生きる人々の実情を読者が納得出来るような方法で小説に描き、あわせて英国の運命を予言的に示したことにある。1901年のヴィクトリア女王の死は大英帝国の終焉への引き金になっていることを象徴的に示しているとともに、成熟した工業化社会の持つ様々な矛盾や価値観の混乱を一挙に表面化させるきっかけでもあった。

フォースターが最も精力的に創作活動を展開したエドワード王朝は、ヴィクトリア女王が亡くなった1901年から第一次世界大戦勃発の年、1914年の二、三年前までの時期とされている⁴⁾。この時期の英国では、成熟した工業化社会への移行とともに都市化が進み、貧困が衝撃的な事実として取り上げられ、社会の

あらゆる分野で、また人間の内面で、深刻な分裂状況が着実に進行しつつあった⁵⁾。当時の政治家、思想家、芸術家達はこの「不安な時代」⁶⁾を生き抜く方法を見いだそうとして苦慮していた。しかし、有効な方法が見つからないまま、現実の社会と人間の内面に生じた亀裂はますます拡大して行った。その亀裂はあまりにも大きくまた深い溝となってしまうので、両者の間に橋を架けることは至難の業であった。また英国の将来についての明確なヴィジョンも見いだしがたい状況であった。

フォースターはこうした時代状況を最も典型的な中産階級の人間の眼で見据え、それを小説に描き込み、何らかの解決策あるいは将来のヴィジョンを提示しようと努力していた。『天使も踏むを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*, 1905), 『いと長き旅路』(*The Longest Journey*, 1907), 『見晴らしの良い部屋』(*A Room with a View*, 1908), および『ハワーズ・エンド邸』(*Howards End*, 1910)等の長編小説は彼のこの間の苦闘と努力との成果なのである。

しかし、初期の3作品では、フォースターが生まれ育った英国上層中産階級の社会に見られる独善的人生観批判をその中心的テーマとしているが、いずれの作品においてもその物語の舞台設定、人物描写、物語の構造などに未熟さが見られる。彼が小説家としての本領を遺憾なく発揮したのは『ハワーズ・エンド邸』からであるという大方の判断に異論を差し挟む余地は少ないように思われる⁷⁾。

『ハワーズ・エンド邸』において、フォースターは作品の題名と同じ名前を持つ屋敷を英国の古き良き伝統の象徴として設定し、その屋敷を誰が受け継ぐべきかという観点から物語を構成している。と同時に、フォースターはハワーズ・エンド邸の住人が誰になるのかは、いわば英国の運命そのものを示すことになると考えている。このことは、すでにトリリングが次のような言葉で明快に指摘している通りである。

Howards End is a novel about England's fate. . . . Like the plots of so

many English novels, the plot of *Howards End* is about the rights of property, about a destroyed will-and-testament and rightful and wrongful heirs. It asks the question, "Who shall inherit England?"⁸⁾

ここで述べられているトリリングの主張を受け入れるためには、「ハワーズ・エンド邸」がどのような意味を持つ屋敷なのか、あるいは単なる「財産」にすぎないのか、などについての検討が必要となる。またこの屋敷と一体化した人物として登場しているウィルコックス夫人 (Mrs Wilcox), その夫で現在の所有者ヘンリー・ウィルコックス (Henry Wilcox), さらに物語の結末でこの屋敷を受け継ぐことになるマーガレット・シュレーゲル (Margaret Schlegel), および彼女の妹ヘレン (Helen) の産んだ私生児など, この屋敷と関わりを持つ人々が英国社会のどの層を代表する人物なのかについても詳細な検討が必要である。

『ハワーズ・エンド邸』のもう一つの重要なテーマは、この作品のエピグラフ、「ただ結びつけよ」 (Only connect...) に込められた作者の意図に関係する。すなわち、何と何をどのような方法で「結びつける」のか、なぜ「結びつける」必要があるのか、「結びつけた」結果何が生まれるのか、などについてどのような解釈が可能か、という問題である。すでに多くの研究者がこれらの問題についての丁寧な考察の結果を発表しているが、それぞれの議論の過程は全てが同じというわけではない。

筆者はこれまでの主要な研究成果のいくつかを参照しつつ、この作品をもう一度読み直し、その内容や特質について検討して行くつもりである。その際に、これまであまり重点が置かれて来なかったと思われる側面、すなわち『ハワーズ・エンド邸』の「英国性」 (Englishness) について中心的に論ずるつもりである。というのもこの作品をより深く読めば読むほど、作者の思想や価値観、作品に描かれている諸事実、さまざまな場面での作者自身のコメント、読者の反応など、作品それ自体にも、またこの作品の周辺にも強烈な「英国性」、英国らしさ、あるいは英国臭さを感じるからである。

2

『ハワーズ・エンド邸』の物語が展開される正確な年代を断定することは困難だが、作品中のいくつかの出来事への言及からほぼ1900年代の4年間であると推測される。この物語の始まりの段階でマーガレットは29歳である。彼女の母親はその16年前、すなわち彼女が13歳のときに亡くなっている。そのとき彼女の叔母、現在のマント夫人 (Mrs Munt) は8歳のヘレン、生まれたばかりのティビー (Tibby) を抱えて寡夫となったマーガレットの父の後妻になることを思いつく。しかし、当時はまだ亡妻の姉妹との結婚を認める法律が可決される前、すなわち1907年以前であったためこの結婚は実現していない。またこの記述がある第3章には、1866年に起こった、ロンドンの北方にある北ウェリントン・トンネル内の貨物列車衝突事故についての言及があるが⁹⁾、これも物語の年代を推測する決め手にはならない。そのほか、自動車の普及の程度、ロンドン郊外の田園都市構想とその進行度などに関する言及もあるが、これらも物語の年代を決定する決め手とはならない。しかしこれらの事実を総合的に判断して、この物語の時代背景が1900年代であると推測しても大きな誤りはないと思われる。

『ハワーズ・エンド邸』の物語の冒頭にはヘレンが姉のマーガレット宛に書いた手紙が置かれている。その手紙にはハワーズ・エンド邸の建物とその周辺の景色や、この屋敷に住んでいるウィルコックス家の人々の様子が陽気な調子で語られている。シュレーゲル姉妹とウィルコックス家の人々はドイツ旅行中に知り合いになっていた。その旅行から帰ったあと、姉妹はウィルコックス家の招待を受け、ヘレンだけがその招待に応じてロンドンの北にあるハワーズ・エンド邸に滞在していたのである。この古びた田舎屋敷は九つの窓があるかなり大きな二階建ての建物で、前面は葡萄の蔓に覆われ、屋根には榆の巨木が覆いかぶさっている。屋敷の周りには牧場があり、梨の木、桜、榎の木なども植えられており、田園生活こそがイギリス人の理想なのだと考える人々にとって、この屋敷は申し分のない環境にあると言える。

ウィルコックス家は、「帝国西アフリカゴム会社」の経営者であるウィルコックス氏とその妻ルース (Ruth)、それにこの夫妻の3人の子供たち、すなわち目下婚約中の長男チャールズ (Charles)、次男のポール (Paul)、それに娘のイーヴィー (Evie) の5人家族である。チャールズはロンドンにある父の会社に勤めている。この二人は大英帝国の土台を築き、現実的思考と行動力によって当時の英国社会を動かしていた中産階級を代表する人物である。彼等は金儲けのために、命令を下したり、組織を動かしたり、それを堅実にコントロールしたりして、毎日多忙な生活をおくっている典型的な実業家なのである。一方、ウィルコックス夫人は一家の女主人でありながら、彼等とはまったく異なる価値観を持っている。彼女の先祖は自営農民であり、その自然と一体になった伝統的な生活様式を受け継ぎ、喧騒に満ちた夫たちの生活から超然として生きている51歳の女性である。

マーガレット宛の手紙のなかで、ヘレンはこのウィルコックス家の印象を次のように伝えている。

He (Mr Wilcox) says the most horrid things about women's suffrage so nicely, and when I said I believed in equality he just folded his arms and gave me such a setting down as I've never had. Meg, shall we ever learn to talk less? I never felt so ashamed of myself in my life. I couldn't point to a time when men had been equal, nor even to a time when they wish to be equal had made them happier in other ways. I couldn't say a word. I had just picked up the notion that equality is good from some book—probably from poetry, or you. Anyhow, it's been knocked into pieces, and, like all people who are really strong, Mr Wilcox did it without hurting me. (HE, p. 3)

ヘレンはこの時まで、人生には「文学と芸術」とが不可欠であると考え、人間

同士の関係を重んじ、理想を求めて生きることを自分の信条としていた。「人間の平等とか婦人参政権などは空理空論に過ぎない、あなた方の人生観は世間知らずの人間のお題目でしかない」と平然と主張するウィルコックス氏のような人間に会ったのはこれが初めてであった。そのためにヘレンはこれまで信じ込んできた彼女の人生観が「迷信」に過ぎなかったのではないかといった感覚に囚われる。彼女はシュレーゲル家の理想主義的考え方とはまったく異なるウィルコックス家の「現実主義的」考え方と彼等の商業主義的価値観に新鮮な驚きを感じる。と同時に彼女はこの一家の持つ力強さ、活力、豪勢な暮らし向きにも魅力を感じていた。ヘレンは感化されやすい性格だったので、わずかに知り得た知識を材料にして勝手にこの一家についてのイメージを作り上げて行く。

そのとき彼女の前に現われたのが彼女と同じ年ごろのポールである。彼女はポールが間もなくナイジェリアへ働きに行くことになっていることも知らずに、一時的な感情に溺れて彼と「恋」に陥る。そのことを知らせる短い手紙がマーガレットのもとへ届いたことにより、シュレーゲル家とウィルコックス家との関わりが始まる。この時たまたまシュレーゲル家に滞在していたジュリー叔母 (Aunt Juley = Mrs Munt) が、体調を崩しているテイビーの看護をしなければならなかったマーガレットの代わりに、ハワーズ・エンドを訪れ、ヘレンのあまりにも性急な恋愛をたしなめようとする。しかし彼女がハワーズ・エンドを訪れた時には、すでにヘレンとポールの「恋」は終わっていた。

この事件によっていくつかのことが明らかになる。まずウィルコックス家の男たちの実態についてである。ヘレンはポールにキスされ愛の言葉を囁かれた時、その「甘美さ」に酔いしれるが、翌朝彼に出会ったときには、彼が何か頼りない、おどおどした態度をとっているのを見て、直観的に彼との「恋」が虚妄であったことに気付いている。彼の頼りなさは彼が結婚しようとしても一文なしであり、彼の行動は「お金こそが堅実な生活と自信の根拠である」というウィルコックス氏やチャールズの信念に反していることに由来していた。ポールは自分の向こう見ずな行動に本気で腹を立てている彼の父親や兄を恐れ、ま

たシュレーゲル家の人々の体面を傷つけたのではないかということも恐れていた。その時のポールに対するヘレンの観察を示しているのが次の文章である。

“Somehow, when that kind of man (Paul) looks frightened it is too awful. It is all right for us to be frightened, or for men of another sort — father, for instance; but for men like that! When I saw all the others so placid, and Paul mad with terror in case I said the wrong thing, I felt for a moment that *the whole Wilcox family was a fraud*, just a wall of newspapers and motor-cars and golf-clubs, and that if it fell I should find nothing behind it but *panic and emptiness*.” (Italics mine. HE, p. 23.)

ウィルコックス家の男共の「外の生活」には、新聞と自動車とゴルフクラブがあるだけで、その「壁」内側には人間味を感じさせるような実体は何一つない。彼等は見かけ倒しの人間であり、自分達の体面を保つ事にいつも汲々としており、彼等の内面には「恐怖と空虚」しか見い出せない。これがヘレンの認識であった。

しかし、ウィルコックス家に関するヘレンの説明を聞いたマーガレットはこれと違った受け止め方をしている。

The truth is that there is *a great outer life* that you and I (Helen and Margaret) have never touched—a life in which *telegrams and anger* count. Personal relations, that we think supreme, are not supreme there. There love means marriage settlements; death, death duties. So far I'm clear. But here's difficulty. *This outer life, though obviously horrid, often seems the real one*—there's grit in it. It does breed character. Do personal relations lead to sloppiness in the end? (Italics mine. HE, p. 25.)

マーガレットのこの言葉にはシュレーゲル家とウィルコックス家の「文化と価値観」との対比が明確に示されている。ウィルコックス家の人々は人間の愛を夫婦間の財産契約として捉え、死を遺産相続税の観点から捉えようとする価値観の持ち主である。彼等の生活は、ヘレンとポールが引き起こした事件でも見られるように、「電報と怒り」とが日常茶飯事となっているような生活である。その根底にある生活原理は現実主義、物質主義、商業主義、功利主義であり、彼等は「目に見えるもの」を相手にして生きているのである。一方、シュレーゲル家の人間は何よりも個人と個人の間を重視し、文学と芸術を愛し、それを糧として「目に見えないもの」を相手にして生きている。彼等の思考と行動の規範は理想主義とヒューマニズムにある。マーガレットは、「個人と個人の間こそが第一だ」とするシュレーゲル家の価値観が通用しない世界が存在することをここで学んでいる。マーガレットは、多くの批評家達も指摘しているように、作者の分身であり、彼自身が抱いていた思想がここに表明されていると考えることができる。¹⁰⁾

シュレーゲル姉妹のこのような考えは彼女たちの父親から受け継いだものとされている。彼女たちの父親はドイツ人である。彼はヘーゲルやカントの理想主義的哲学の影響を受けた人間であり、観念的帝国主義思想を持つ軍人であった。ところが祖国ドイツが積極的に植民地政策を推進し、実際に大ドイツ帝国建設に乗り出したため、彼はそれを嫌って英国に帰化する。しばらくの間、ある地方大学に勤務していたが、やがてエミリー (Emily) という名の娘と知り合い、結婚する。マーガレットとヘレンはこの父親の体験と思想に基づく教育を受けて成長するが、弟のティビーが生まれたとき、母エミリーが亡くなり、父親もその5年後に死亡している。シュレーゲル家の3人の子供たちは親が残してくれた株式や債権がもたらす利子、マーガレットとヘレンはそれぞれ年600ポンド、ティビーは年800ポンドの収入で生活している。彼女たちの住む家は西ロンドンの高級住宅地ウィッカム・プレイスにあり、もっぱらコンサートに行ったり、文学談義や芸術鑑賞、彼女たちと同じ様な生活レベルの友人・知人たち

とのサロンでの知的お喋りなどを楽しんでいる。いわば実業の世界に寄生した形のデレタント的生活を送っているのである。

このシュレーゲル姉妹のモデルについて、作者自身はG. L. デイキンソン (Goldsworthy Lowes Dickenson) の娘達であると語っているが、¹¹⁾ W. ストーン (Wilfred Stone) はブルームズベリー・グループの活動の中心的な役割を果たしていたスティーブン姉妹 (The Stephen sisters) であると指摘した上で、彼女たちの特性について次のように述べている。

They (the Schlegels) are thoroughly Bloomsbury: they entertain musicians, artists, and even an actress; they believe in literature, art, and personal relations; they are moralists and anti-Utilitarians; they have a snobbish faith in the rightness of their own sensibilities. . . . Like Virginia and Vanessa, the Schlegels have been strongly shaped by the example and teaching of a father. His influence still fills the house.¹²⁾

スティーブン姉妹 (Virginia and Vanessa) とシュレーゲル姉妹にはいずれも弟、トビー (Thoby) とシオボールド (Theobald=Tibby) とがいる点でも共通している。両者の家に芸術家やヒューマニストたちが出入りしている点も同じである。また、彼らのいずれもが自分たちの知性や感受性に傲慢と思えるほどの自信と確信を持っていることから、ストーンの指摘は正鵠を得ていると言って良い。

この第二回目のシュレーゲル家とウィルコックス家の接触のあと、両家族はさらに深い関わりを持つようになる。それはウィルコックス家がやがてウィッカム・プレイスに引っ越してきたことがきっかけであった。ヘレンは二度とこの家族と関わり合いになりたくないとの明確な態度を示すが、マーガレットはウィルコックス夫人には共鳴出来る点もあったため、彼女をシュレーゲル家のお茶の会に招待したり、クリスマスプレゼントのための夫人の買い物につき

合ったりする。

ウィルコックス夫人は、過去において自然と一体になった生活を送っていた「自営農民」の末裔であり、古き良きイングランドの伝統を受け継いで生きている人物である。ヘレンとポールの「恋」をめぐる、ウィルコックス家の男たちとシュレーゲル家から派遣された格好のマント夫人との間で騒ぎが起っていたとき、彼女は何の苦もなくこの騒動を静めている。この時の夫人の様子は作品の中では以下のように説明されている。

She (Mrs Wilcox) approached just as Helen's letter had described her, trailing noiselessly over the lawn, and there was actually a wisp of hay in her hands. She seemed to belong not to the young people and their motor, but to the house, and to the tree that overshadowed it. One knew that she worshipped the past, and that the instinctive wisdom the past can alone bestow had descended upon her—that wisdom to which we give the clumsy name of aristocracy. High-born she might not be. But assuredly she cared about her ancestors, and let them help her. When she saw Charles angry, Paul frightened, and Mrs Munt in tears, she heard her ancestors say: "Separate those human beings who will hurt each other most. The rest can wait." So she did not ask questions. Still less did she pretend that nothing had happened, as a competent society hostess would have done. (HE, pp. 19-20)

この文章の前半では、夫人は過去の英知を受け継ぎハワーズ・エンドの屋敷と一体になった存在であり、いわばこの「土地の霊」を体現した人物であることが示されている。ウィルコックス夫人は、チャールズとポール、それにマント夫人とが言い争っている現場に姿を現し、先祖から受け継いだ英知に耳を傾けてそれぞれに適切な行動を指示し、三人を引き離す。ただそれだけのことで彼

女は「社交界の有能なホステス」のように、その場の騒ぎを収め、平穏と調和を取り戻すことに成功する。

この場面はウィルコックス夫人の『ハワーズ・エンド邸』における存在理由を象徴的に示した場面だと言える。「過去」の象徴であり、古き良きイングランドそのものであるハワーズ・エンドの屋敷に留まっている限り、彼女は自己の存在感を示すことができる。しかし、ひとたびその屋敷を離れ、現代の都市文明の中心のようなロンドンへ出てくると、彼女は陰の薄い存在になってしまう。彼女は「過去」を生きる人間であり、現代の都市文明にはなじめない人物として描かれているのである。

ウィルコックス夫人がウィッカム・プレイスへ引っ越して来た後、マーガレットが招待したお茶の会でも、彼女是一座の話題に加わろうとせず、孤立したままの状態を潰している。また、彼女の英知は夫のウィルコックス氏には何の影響も持っていない。彼女は英国の「現代的状況」にあっては無力なのである。現代のロンドンにおける彼女のこのような実在感のなさは「古き良きイングランド」の衰退をそのまま表していると言える。

マーガレットはウィルコックス家の男どもとは全く異なった感性の持ち主であるこの夫人の人柄に惹かれ、夫人の招待に応じて一緒にハワーズ・エンド邸を見物に出かけようとする。しかしその計画はウィルコックス氏が急に旅行計画を変更して帰宅したために、実現しなかった。

このことがあった数日後にウィルコックス夫人は急死する。家族のものが各々に妻の死、母親の死を悲しんでいるところに、夫人が亡くなる直前に鉛筆で走り書きした遺言状が届けられる。それには「ハワーズ・エンド邸をマーガレット・シュレーゲル嬢に譲りたい」(HE, p. 94)という故人の遺志が書き付けられていた。しかし、それは日付も署名もない、法律上は遺言状の体裁を整えていないものであった。彼等は、およそ相続する資格のないマーガレットにハワーズ・エンド邸を譲るとする故人の遺志は遺族に対する裏切りだと考えたり、ひょっとするとマーガレットが介入してその遺言状を書かせたのかも知れな

い、などといった場違いな議論を繰り返したあげく、その手紙を引き裂いて暖炉で燃やしてしまう。すでに指摘したように、ウィルコックス家の人々にとって、たとえそれが身内の死であろうとも、「死」は遺産相続の問題としてしか捉えられていないのである。

この作品では作者が頻繁に物語の中に顔を出し、自由に個々の出来事について意見を述べる形になっているが、この場面でも作者は次のようなコメントを述べている。

To them (the Wilcoxes) Howards End was a house: they could not know that to her it had been a spirit, for which she sought a spiritual heir. And—pushing one step further in these mists—may they not have decided even better than they supposed? Is it credible that the possessions of the spirit can be bequeathed at all? Has the soul offspring? A wych-elm tree, a vine, a wisp of hay with dew on it—can passion for such things be transmitted where there is no bond of blood? No; the Wilcoxes are not to be blamed. The problem is too terrific, and they could not even perceive a problem. (HE, pp. 96-7)

作者は故人の遺志を無視したウィルコックス家の人々を非難しようとしているのではない。「目に見えぬもの」、たとえば人間の魂とか情熱を相続するなどということを真面目に考えることは馬鹿げたことだと考える人々にとっては、彼等のとった行動はむしろ当然のことだ。故人にとってハワーズ・エンド邸は「一つの魂」であり、彼女は「その魂の相続人を求めている」などという深遠な意味をウィルコックス家の遺族たちが理解できなくてもそれは当然のことだ、何ら責められることではない。彼等にとってハワーズ・エンド邸は「一つの財産」に過ぎなかったのである。彼等はただ故人の人間としての最後の願いを聞き入れてやらなかっただけのことだ。これが上に引用した作者のコメントの要点で

ある。

ハワーズ・エンド邸が一つの財産としての「家」なのか、それともイギリス人にとって「家は城」と言われるときの平和と安全と心の安らぎの場としての「家庭」なのか、という問題はこの後もう少し詳しく検討する予定である。

3

『ハワーズ・エンド邸』の物語は、この唐突と思えるほどのウィルコックス夫人の急死から、2年後の場面へと変わる。この作品に登場する三家族のうち、これまでに本格的に登場していないのはバスト家 (The Basts) である。といってもこの物語の展開に決定的な役割を果たすレナード・バスト (Leonard Bast) とジャッキー (Jacky) はこの段階でやっと結婚して家庭を持ったばかりである。シュレーゲル姉妹と一度だけ接触を持ったレナードは、この2年間、姉妹の脳裏から消え失せていた。

このレナードとシュレーゲル姉妹との2年前の出会いの様子は以下の通りである。ヘレンとポールの恋愛騒動が収まったあと、シュレーゲル一家はベートーヴェンの交響曲第5番の演奏会に行く。そのときヘレンがうっかりして他人の傘持って帰宅する。その傘の持ち主がレナードだったのである。マーガレットはレナードに名刺を渡し、ウィッカム・プレイスまで取り戻しに来るように頼む。彼はポーフォリオン保険会社の事務員であり、自らの教養や知識のなさを自覚し、何とかして中流階級の文化的世界へと入り込み、知的会話を楽しむことを夢見ている20歳の青年である。彼はラスキンやメレデイス、R. L. スティーブンソン等の本を読み、可能な限りコンサートへも出かけ、文学と芸術に親しむことで人格を高め、文化的生活を送りたいと願っていた。彼は一生懸命に紳士の振りをしながら階級社会の階段を昇って行こうとしているのである。

クイーンズホールでのコンサートでシュレーゲル姉妹と出会った時、彼はテムズ川の南岸、つまりは貧しい人々が住んでいる地区にある、半地下の穴蔵のような部屋で暮らしていた。そこには同棲相手のジャッキーという名前のでっ

ぷりと太った女がいた。二人はレナードが21歳になったら結婚する約束をしていた。作品の中では、ジャッキーは「まともな (respectable) 女ではなかった」(HE, p. 48) という穏やかな言葉で描写されているが、実際のところ彼女の派手な服装や装身具等から判断して、売春婦のような商売をしている女のように思える。しかも、彼女は33歳であり、その商売を続けるには年をとりすぎていた。

一方、レナードについては、作者は作品の中で「この物語は一応の身分のある人々、ないしはその振りをしている人々だけを扱うつもりであり、ひどい貧乏人には用がないし、考えることも出来ない」(HE, p. 43) と宣言している。その上で作者はレナードの人物像について次のように説明している。

The boy, Leonard Bast, stood at the extreme verge of gentility. He was not in *the abyss*, but he could see it, and at times people who he knew had dropped in, and counted no more. He knew that he was poor, and would admit it; he would have died sooner than confess any inferiority to the rich. This may be splendid of him. But he was inferior to most rich people, there is not the least doubt of it. He was not as courteous as the average rich man, nor as intelligent, nor as healthy, nor as lovable. (Italics mine. HE, p. 43)

この文章で最も興味深い点は、レナードが当時の英国階級社会のどのあたりに位置づけられているかという点である。中産階級の最上層部には、いわゆる「紳士」と呼ばれ得る階級に属している大金持ち (most rich people) と平均的な金持ち (the average rich man) が居る。一方、最下層部には「どん底の生活」にあえいでいる貧困階級に近い人々が居る。レナードはあと一步で貧困階級に落ち込むすれすれのところ、すなわち中産階級の一番下のあたりに位置している。レナードは自分の位置を自覚しており、精神も肉体も、礼儀作法などの点でも自分より上の階層の金持ちに比べて劣っていることをも認めていた。

トリリングは『ハワーズ・エンド邸』は階級闘争の物語だと断言し、¹³⁾ さらにその階級闘争は同一階級の中で闘われている、と述べている。

The class struggle is not between the classes but within a single class, the middle. Neither the aristocracy nor the proletariat is represented and the very poor are specifically barred—We are not concerned with the very poor, the novelist says.¹⁴⁾

トリリングのいう同一の階級とは、上で説明したように、幅の広い中産階級のことである。この物語の主要な登場人物はすべてこの階級に含まれている。彼はウィルコックス氏、シュレーゲル姉妹、およびレナードの中産階級内における位置付けについて次のように述べている。

At the far end of the vast middle class scale is Leonard Bast, the little clerk. He stands “at the extreme verge of gentility,” at the very edge of the “abyss” of poverty. At the upper end of the scale is Mr. Wilcox, the business man, rich and rapidly growing richer. Between are the Schlegels, Margaret and Helen, living comfortably on solid, adequate incomes.¹⁵⁾

トリリングは、中産階級の最上層部にウィルコックス家、その最低部にレナード・バスト、そしてシュレーゲル姉妹はその中間の位置を占めている、と分析している。物語ではこれら三者の間で闘争が始まることになるが、その際考慮しなければならない点は彼等の間に見られる格差である。トリリングは上記の文章でシュレーゲル姉妹が「堅実で十分な収入」を得て安楽に暮らしている、と述べている。その生活基盤は彼女たちの年600ポンドの収入である。ウィルコックス氏の収入については、明確な数字が示されていないが、ウィルコックス

ス夫人の死後2年が経過した段階での彼の財産は百万ポンド近くになっていたという記述がある。(HE, p. 130) また、レナードの収入についての数字による言及は見当たらないが、彼の生活状況などを参考にすれば「貧困線」に近い収入しかなかったと推測してよいと思われる。つまり同じ中産階級の中でも、その最上層部と最下位とのあいだには気が遠くなる程の収入格差があったと考えられるのである。

歴史学者のP. ラスレット (Peter Laslett) は『われら失いし世界』(*The World That We Have Lost*, 1965) において、当時出版されていた各種統計や研究に基づいて1900～1910年頃の中産階級の実状を次のように説明している。すなわち、上層中産階級は年収が700～1,000ポンド以上のもので、当時のイングランドとウェイルズの全所帯約700万のうち28万所帯、中層および下層中産階級は年収150～700ポンドで、約80万所帯、これらの階層に属しているのは全人口の約15%である。残りの85%の人口(約600万所帯)はそれ以下の労働者階級であり、このうち年収が100ポンド以下の「極貧状態」にあるものが全人口の15%という状況であった。当時最も深刻な問題になっていたのは全人口の85%が陥っているこの「貧困」の問題であった。¹⁶⁾

ラスレットはS. ラウントリー (S. Rowntree) のヨーク市の貧困状況を分析した有名な本、『貧困、ある町の研究』(*Poverty, a Study of Town Life*, 1901) の中の次のような「貧困」の定義を紹介している。すなわち「貧困に陥っている家族とは、総収入が、単なる肉体的な力を維持するのに必要な最低限の額にも達しない」家族のことである。ラウントリーによれば、一家族の年収が100ポンドないしそれ以下を「貧困線」だとしており、この数字を当てはめて見ると1901年において全イングランドの人口の四人に一人が貧困に陥っていたことになり、彼等は乞食同然の生活を強いられていたと結論づけている。この事実は当時のイギリス人たちにとってきわめて衝撃的であり、彼らは困惑を隠し切れなかったはずだ、とラスレットは推測している。¹⁷⁾

またもう一つの深刻な問題であった「都市化」についても、ラスレットは次

のようなラウントリーの研究結果を紹介している。その一つは「1899年には、イングランドの人口の四分の三以上が『都市域』に住んでいた」という事実であり、もう一つは「やがて都市と農村のバランスが逆転し、コンクリートとレンガとモルタルの間に育ったイギリス人こそが典型的で、木々と野原の緑とともに成長した人間などは例外とみなされる時代が来る」という予測である。¹⁸⁾

さらに別の歴史家、D. リード (Donald Read) も彼の著書、『エドワード王朝期のイングランド』(*Edwardian England 1901-15: Society and Politics*, 1972) の中で、1871年に大ロンドン地区の人口が387万人、それが1901年にはおよそ二倍近くの658.6万人、さらに1911年には725.6万人になっている事実を挙げ、「都市への人口集中」、「住宅不足」、「貧困」などが大きな社会問題となっていたことを指摘している。¹⁹⁾

当時の時代状況を同時代の人々がどのように捉えていたのか、という点について最も注目される書物はマスターマン (C. F. G. Masterman, 1873-1927) の『イギリスの現状問題』(*The Condition of England*, 1909) であろう。彼は当時のリベラル派知識人の筆頭の一人であり、1906年に自由党の国会議員になり、1914年からはアスキス内閣の閣僚にもなっている。彼はこの書物のほかに、当時のイギリスが直面していた諸問題に関する彼自身の研究結果を『大英帝国の中心』(*The Heart of the Empire*, 1901), 『どん底から』(*From the Abyss*, 1902), および『第一次世界大戦後のイングランド』(*England after War*, 1923)などに発表している。いずれも当時のイングランドの「現状問題」を扱ったものだが、彼は政治家らしく、都市の急成長、人口の都市集中、貧富の差の拡大、などの大きな変化が大英帝国の運命をどのように変えることになるのかといった大状況的課題について考察している。²⁰⁾ 例えば、次の文章は彼の時代認識を最も簡潔に要約しているものと思われる。

In England the cities are most monstrous, and black, and disorganized; and the aggregations which sprawl at the mouths of the rivers or amid the

wastes of the manufacturing districts most effectually challenge the advocate of any life that is secure, and passionate and serene. These aggregations are something new in the history of things, to which no former time can furnish any precedent or parallels.²¹⁾

マスターマンは、ここで全国至るところの河口や工場地帯の廃棄物の中で不気味に広がって行く「無秩序な過密化」は英国の歴史上、今だかつて人々が経験したことのない新しい事態である、と述べている。と同時に彼はこうした醜悪な都市社会の出現と、中世以来の生活リズムを維持してきた農業を中心とする田園生活が破壊されつつあることを嘆いている。彼は当時の「英国の良心」を代表する人物としてこれらの問題について具体的な提案をしているが、その心中は時代の方向性不明から来る不安感に満ちていたようだ。それは “It is impossible to say in what direction this change will eventually work as regards the conducts of Imperial politics.”²²⁾ とか, “What will the future make of the present? That is a question which opens a wide field for speculation, but secures no certain reply.”²³⁾ などといった言葉にもはっきりと表われている。

もう一つマスターマンの注目すべき発言がある。それは都市化が進むにつれて労働者階級はスラム街に、下層中産階級は都市近郊に、そして堅実な上層中産階級は都市の郊外に、それぞれ住み分けるという現象が見られるようになったという指摘である。²⁴⁾ 特に富裕な上層中産階級の人々は次々と郊外へ住宅を移し、そこから大都市へ通勤するという新しい生活様式を好む傾向が表われていることも指摘している。この傾向については『ハワーズ・エンド邸』でも言及されている。たとえば、ウィルコックス氏は、第15章で、ハワーズ・エンドの屋敷の周りがだんだんロンドン郊外みたいな状況になってきたので、この屋敷を借家にしたと語っている。さらに、彼は「私の考えでは、ロンドンの市内に住むか、もしくはロンドンを離れて住むか、どちらかを選ぶしかない。そこ

で私はスローン・ストリートのすぐ近くのデューシー・ストリートに一軒、そしてシュロプシャーにあるオニトン・グレンジと呼ばれている屋敷を一軒買いました」(HE, p. 133)と述べている。彼の話では、チャールズはまだハワーズ・エンド邸のすぐ近くのヒルトンに住んでおり、自動車でロンドンまで通勤しているとのことであった。マスターマンが述べているように、都市化が次第に郊外へと広がり、それに伴って中産階級の人々の生活パターンも変化し始めていることが伺える。

この傾向はその後の田園都市構想へと発展し、古き良きイングランドの伝統である田園生活の消滅へと繋がって行くことになるのである。しかし、その田園も次第に都市の浸食を受け、『ハワーズエンド邸』の最終章では、田園がもはや安息の地ではなくなりつつあることについての、シュレーゲル姉妹の次のような会話がある。

“There are moments when I (Margaret) feel Howards End peculiarly our own.”

“All the same, London’s creeping.”

She (Helen) pointed over the meadow—over eight or nine meadows, but at the end of them was *a red rust*.

“You see that in Surrey and even Hampshire now,” she continued. “I can see it from the Purbeck downs. And London is only part of something else, I’m afraid. Life’s going to be melted down, all over the world.” (Italics mine. HE, p. 337)

「都市」の郊外への浸食は、この会話の中の「赤錆」で象徴されている。その「赤錆」は成熟した工業化社会の象徴である「機械」の「赤錆」であり、ヘレンはそれがハートフォードのハワーズ・エンドだけでなく、サリーやハンプシャーにまで浸食してきたと語っている。フォースターは、英国の「最も伝統

的な文化や風俗」を受け継いできた「田園生活」がもはや望み得なくなりつつあることを、「赤錆」という一語で暗示しようとしているのである。

話がだいぶ横道にそれてしまったが、『ハワーズ・エンド邸』は「イングランドの現状問題」を扱った小説だという捉え方もあるので、上で述べたような時代状況に対する認識は欠くことが出来ないと思われる。例えば、J. コルマー (John Colmer) は “Indeed, the growing materialism of the Edwardian age and the challenge of the machine to traditional culture were topics no responsible novelist could ignore.”²⁵⁾ と述べ、「変わり行くイギリス国民のエトスと大都市ロンドンの挑戦」という観点抜きで『ハワーズ・エンド邸』を論じることは出来ないと考えている。²⁶⁾ コルマーのいう「国民のエトス」とはもちろん「ハワーズ・エンドの屋敷」に付随している特質のことであり、彼はトリリングと同じように、この物語のテーマはこの屋敷が象徴する「連続性」にあると述べている。²⁷⁾そしてこの物語の全ての登場人物はある意味で、「精神的な憩の家」を探している人物たちであるとも述べている。²⁸⁾

『ハワーズ・エンド邸』の物語が始まって2年が過ぎた段階でハワーズ・エンド邸の真の所有者であったウィルコックス夫人はすでに死亡している。彼女はマーガレットとの短い付き合いの中で、ハワーズ・エンド邸を受け継ぐ資格があるのはマーガレットであると直観的に認識し、それを「遺言」として残した。しかしウィルコックス夫人のこの「直観」が正しかったのかどうかは、もう少し物語の展開を見た上判断せざるを得ない。

4

『ハワーズ・エンド邸』の物語が中産階級内の闘争であることは、すでに指摘した通りである。その階級の最下位に位置しているレナード・バストが二年ぶりにシュレーゲル一家の前に姿を現わす。その先ぶれとして彼の妻ジャッキーがまずウィッカム・プレイスを訪問している。彼女は、その前日に家に帰らな

かった夫のレナードの行き先がマーガレットの家ではないかと疑っていたからである。レナードは二年前に「傘を受取に来るように」といってマーガレットから渡されていた名刺をまだ持っていた。その名刺をジャッキーが見つke、その名刺の持ち主の女性とレナードとの仲が怪しいと睨んでウィッカム・プレイスを訪ねたのである。そのことを知ったレナードが妻の無礼を謝るためにマーガレットの前に姿を現わす。シュレーゲル一家とレナードとのこの二回目の出会いをきっかけとして、この物語は同一階級内の三者がそれぞれの運命を決める絡み合いへと発展して行く。

レナードが大事にしまっていたマーガレットの名刺は、彼にとっては一つの憧れであり、何とかして参入したいと願っている「教養と文化の世界」を象徴するものであった。彼は文明に誘われて都会に出てきた農民の三代目で、すでに先祖が持っていた頑健な体も素朴な顔つきも失っている。かといって、洗練された精神中心の生活を送っている訳でもない。(HE, p. 113) マーガレットは、この種の人間たちは善良ではあるが、その教養は本物とは言えず、ただ断片的な知識を持ち合わせているに過ぎないということを知っていた。(HE, p. 113)

マーガレットのこのような見方が正しかったことを改めて証明するかのよう
に、この時、レナードは何かの本で読んだことのある「一つの冒険」——暗闇
の中を北極星を目印にして一晩中森や野原を歩き回ること——を楽しんでいて
その夜は家には帰らなかったと語る。マーガレットは、それを本物の文化人の
する「冒険」の一つだとして喜々として語るレナードの精神の浅薄さを哀れみ、
彼の話に一応耳を傾けるが、二人の間には教養に対する考え方の点で大きな違
いがあることを認識せざるを得なかった。

その後、シュレーゲル姉妹は討論クラブの晩餐会の席で「百万長者の遺産を
どのように処分すべきか」についての議論に参加している。この時、その遺産
はレナード・バストのような貧しい人間に与えることが正しいことなのかどう
かを巡る激論となり、この問題についてマーガレットは次のような意見を述べ
ている。

Give them a chance. Give them money. Don't dole them out poetry books and railway tickets like babies. Give them the wherewithal to buy these things. When your socialism comes it may be different, and we may think in terms of commodities instead of cash. Till it comes give people cash, for it is the warp of civilization, whatever the woof may be. The imagination ought to play upon money and realize it vividly, for it's the—the second most important thing in the world. (HE, p. 125)

マーガレットのこの意見の前提には、「お金は教育的である」(HE, p. 124) という信念があり、その上で、彼女は「バスト氏のような人達にお金をあげなさい、たとえそのお金で何を買えるのか十分に分かっていないにしても、彼らにそのお金の生きた使い方を学ばせるためのチャンスを与えるべきだ」と主張しているのである。お金を土台としない文明の存在も想像力の獲得も考えられない、従って、彼らにお金を与えることが先決であり、彼らが抱いている理想についての議論は二の次だ、というのが上の文章で示されているマーガレットの考えなのである。しかし、彼女のこのような「愛他主義」的発言は一座の婦人達の同意を得るには至らなかった。

そのあと、マーガレットとヘレンが二人でテムズ河畔のベンチに座り、バスト氏を話題にして話し込んでいた時、偶然その場を通りかかったウィルコックス氏に出会う。彼はこの2年の間に、好調な事業と投資から多額の収益をあげ、収入は以前の2倍近くになっていた。今や押しも押されぬ財界の名士として二人の前に姿を現したのである。ヘレンは、「百万長者」と呼ぶにふさわしいほどの財産を所有しているウィルコックス氏にバスト氏の問題について彼がどのような意見を持っているか尋ねてみる気になる。すると、ウィルコックス氏は、バスト氏の勤務先のポーフォリオン火災保険会社は倒産するかもしれないのでこの会社にはなるべく早く見切りをつけた方が良い、という情報をもたらす。

シュレーゲル姉妹は、この情報をレナードに伝えてやりたいと考え、彼をお茶に呼ぶことにする。作者が“...the Schregels had never played with life. They had attempted friendship, and they would take the consequences.” (HE, p. 139) と述べているように、彼女達はたとえ別の階級の人間であってもいったん友達になろうとした以上、最後まで責任をとるべきだという信念を持っていたからである。レナードにとってはこの招待は薄汚い穴蔵での生活から一時的にでも離れて、久しぶりに文学や本について語るロマンティックな時間が持てるチャンスであり、それを期待して彼は姉妹の招待に応じる。しかし、シュレーゲル姉妹は婉曲的に彼の会社の実状についての質問を繰り返し、何とかして彼に自分の置かれている立場を理解してもらおうと試みる。彼は文学談義を楽しもうという期待感を抱いてやって来たがそれが裏切られただけでなく、自分の私生活について二人から干渉をうけたことに腹を立てる。丁度そこへウィルコックス氏が訪ねて来たこともあって、彼は気分を害したまま帰宅する。

こうした事情を知ったウィルコックス氏は、シュレーゲル姉妹に対して、レナードのような男に対して「寛大すぎる」と忠告し、さらに次のように語る。

You (Margaret) behave much too well to people, and then they impose on you, I know the world and that type of man, and as soon as I entered the room I saw you had not been treating him properly. You must keep that type at a distance. Otherwise they forget themselves. Sad, but true. They aren't our sort, and one must face the fact. (HE, p. 141)

ウィルコックス氏は、レナードのような階層の人間はやさしくしてやればつけあがるだけで、紳士淑女たるものはその様な連中と付き合ってはならない、と述べて、マーガレット達をたしなめようとする。彼は彼女達に比べれば、世間のことを良く分かっており、世の中には自分達の階級の常識が通じない人間達

が多いことも良く分かっている。階級を越えて「友情」を育もうとしても所詮無理なことだ、と忠告しようとする。しかし、人間関係を何よりも大切にしたいと思っているマーガレットは彼の意見に反論して、次のように言う。

“His brain is filled with the husks of books, culture—horrible; we want him to wash out his brain and go to the real thing. We want to show him how he may get upsides with life. As I said, either friends or the country, some”—she hesitated—“either some very dear person or some very dear place seems necessary to relieve life’s daily gray, and to show that it is gray. If possible, one should have both.” (HE, p. 142)

「バスト氏の頭の中には本とか文化の外皮だけが詰まっていて、その殻に包まれた中味は殆ど入っていない、そればかりか彼は自分の人生が灰色であることすら認識していない。何が本物であるのかを何とかして分からせてやりたい」というのがマーガレットの意見なのである。彼女のこのような主張は、彼女の「愛他主義」的信条に根ざすものであるが、この後にウィルコックス氏の痛烈な批判を引き出していることからわかるように、いささか傲慢であり、無責任だと思える。ウィルコックス氏はマーガレットの「思いやり」は現実性を欠いている、と指摘した上で彼女をつぎのような言葉で批判している。

You know nothing about him. He probably has his own joys and interests—wife, children, snug little home. That’s where we practical fellows—he smiled—“are more tolerant than you intellectuals. We live and let live, and assume that things are jogging on fairly well elsewhere, and that the ordinary plain man may be trusted to look after his own affairs. . . . I have heard you rail against London, Miss Schlegel, and it seems a funny thing to say but I was very angry with you. What do you

know about London? You only see civilization from the outside. I don't say in your case, but in too many cases that attitude leads too morbidity, discontent and socialism." (HE, p. 143)

ウィルコックス氏がこの文章で言おうとしたことは次のように要約出来る。すなわち、「人は人、自分は自分」という原則が最も实际的であり、「ごく普通の平凡な人間でも自分のことは自分で何とかするものだ」、だから、例えばバスト氏の例のように、彼自身の内面が良く分からないまま干渉することは余計なお節介にしかない。彼女のロンドンに対する批判の仕方を見ても分かるように、「知識人」はとにかく外面的な事実だけを見て、文明批判に走る傾向がある。それは不健全で、人々の不満と社会主義的思考方を引き出すことにつながる無責任な態度である。ウィルコックス氏はこのように述べてシュレーゲル流の考え方を批判しているのである。

このようなウィルコックス氏の批判から分かることは、彼が現実主義的な「俗物」であるということだ。マーガレットの「寛大さ」は個人と個人の関係を何よりも大事だとする彼女の信念に基づくものであり、人生が「灰色」であることが分からない人にはそれを分からせてやることが「知識人」の責任である、というようなマーガレットの考え方には彼はとてもついて行けない人物だったのである。

しかしながら、ウィルコックス氏が、“Your mistake is this, and it is a very common mistake. This young bounder has a life of his own. What right have you to conclude it is an unsuccessful life, or, as you call it, ‘gray?’” (HE, pp. 142-3) と尋ねた時、マーガレットは返事が出来なかった。つまり「バスト氏の人生が灰色だ」という彼女の見方は一方的な思い込みであることを認めざるを得なかったのである。彼女はウィルコックス氏の批判が的を得ていることを認めると同時に、彼がなぜそのように熱心に彼女の身を案じてくれるのか不思議に思い始める。以前から彼が魅力的な男性であると感じてい

たが、このとき彼女はひょっとすると彼はバスト氏に対して嫉妬しているのではないか、すなわち彼はマーガレットの気持ちを必死で自分の方に向けようとしているのではないか、ということに気付いたのである。この嫉妬心はウィルコックス氏のマーガレットに対する恋心の裏返し表現であり、それはこの後のシンプソン・レストランでの思惑ありげなディナーとシュレーゲル一家の家探しへの好意的な協力、そして求婚への伏線となる。

ウィルコックス氏は彼の18歳になる娘イーヴィの婚約者をマーガレットに紹介するという口実でマーガレットをシンプソン・レストランに招き、彼女ともっと親しくなろうと画策する。その後、借家契約が切れるために新しい家を探しているマーガレットにデューシー・ストリートにある彼の持ち家を案内している時、彼はマーガレットに求婚する。その場面はいたって散文的であり、「愛している」という言葉すら出て来ていない。しかし、彼女は彼が性的衝動からではなく、彼女の人格自体を愛してくれていると思い込み、彼の求婚に応じる決心をする。

この決心を打ち明けられたヘレンは当然のことながら強固に反対する。彼女はポールとの恋愛騒動の時に見抜いていたウィルコックス一族の本当の姿、すなわち彼等の内面には「恐怖と空虚」しかないし、かれらの日常的な外側の生活は「電報と怒り」があるだけだと判断していたからである。彼女はマーガレットにウィルコックス氏との結婚を思い留まるよう懇願する。しかし、ヘレンのこうした説得に対して、マーガレットは次のように反論している。

“That’s foolish. In the first place, I disagree about the outer life. Well, we’ve often argued that. The real point is that there is the widest gulf between my love-making and yours. *Yours was romance ; mine will be prose.* I’m not running it down—a very good kind of prose, but well considered, well thought out. For instance, I know all Mr Wilcox’s faults. He’s afraid of emotion. He cares too much about success, too

little about the past. His sympathy lacks poetry, and so isn't sympathy really. I'd even say that,..., spiritually, he's not as honest as I am. Doesn't that satisfy you?" (Italics mine. HE, p. 171)

マーガレットは、ヘレンとポールとの間の恋愛は「ロマンス」であり、自分とウィルコックス氏との「結婚」は「散文的」であると分析している。彼女はウィルコックス氏の人格も欠点も——彼が誠実でないことも含めて——十分知り尽くしている、何もかも承知の上の、いわば大人同士の「恋愛」であることをヘレンに分かってもらおうとしている。彼女はヘレンの様に頭からウィルコックス的生き方を否定しようとはしていない。それは彼女の次の言葉からも明らかである。

"If Wilcoxes hadn't worked and died in England for thousands of years, you and I couldn't sit here without having our throats cut. There would be no trains, no ships to carry us literary people about in, no fields even. Just savagery. No—perhaps not even that. Without their spirit life might never have moved out of protoplasm. More and more do I refuse to draw my income and sneer at those who guarantee it." (HE, pp. 171-2)

ヘレンがポールに惹かれた理由はウィルコックス一族の「男性的」な面であった。しかし、彼女はポールの内面の「恐怖と空虚」を見て、かれらは本物の男性ではないことに気付き、ポールを切り捨てる。しかし、マーガレットはヘレンよりも現実的考え方の持ち主であり、ウィルコックス家の「電報と怒り」の生活がなければ、文学好きで、ダイレクタント的な自分達の生活は継続できないことが分かっている。したがって、ウィルコックス家の人々を始めとする実業家たちを無下に軽蔑したり、憎んだりすることは間違っているという認識を

示している。マーガレットは、衝動的なヘレンと違って、聡明であり、想像力に富み、思慮深い人間であるので、彼女のウィルコックス氏への愛情についても、より「現実的な」態度で考えようとしている。

この点についてはコルマーの次の文章でも明確に指摘されている。

The Schlegels are attracted towards the Wilcoxes because they admire their positive qualities and because they are conscious of the characteristic weakness of their own circle. They admire the Wilcoxes' energy, their power to command, to organize and control, their talents for honest hard work.²⁹⁾

シュレーゲル姉妹は、彼等の実業家としての能力、勤労精神、活力などは否応無く認めざるを得ないと思っている。というのも彼等は彼女達のような理想を追求する「知識階級」の存在を経済的に保証しているからである。マーガレットがウィルコックス家を擁護するのはこのことを十分認識しているからである。

ヘレンは徹底した理想主義者であるので、彼等の価値観を認めようとしなない。しかし、マーガレットは彼等の現実主義的生き方、実業家として成功することが全てだとする考え方を变えることは可能であると思っている。彼女がウィルコックス氏の愛を受け入れる決心をしたときの彼女のこのような楽観的な考えは以下の引用でも明らかである。

Only connect ! That was the whole of her sermon. Only connect the prose and the passion, and both will be exalted, and human love will be seen at its highest. Live in fragments no longer. Only connect, and the beast and the monk, robbed of the isolation that is life to either, will die.

Nor was the message difficult to give. It need not take the form of a “good talking.” By quiet indications the bridge would be built and span their lives with beauty. (*Italics mine.* HE, pp. 183-4)

人間が生きて行くのに精神と肉体との統一が必要である。すなわち冷静な判断力と肉体的情熱が不可欠である。しかるにウィルコックス氏の精神は「全ての人間関係は財産関係の延長である」といった不健全なものである。しかも、彼は不徹底な禁欲主義的教育を受けて来て、自らの肉体的情熱、すなわち性的な情熱を抑制することが美德だと考えている。妻を愛することがどういうことなのかもよく分かっていない人間だ。人間の内部に肉体的なものを憎悪する聖者のような側面と肉体的なものに執着する動物的な側面とがある。この両極に橋を架けることの出来る人間こそが自然な存在であり、その橋とは「愛」である。このことをウィルコックス氏に分からせること、これが彼女に与えられた使命であるとマーガレットは考えているのである。しかしながらウィルコックス氏は余りにも「鈍感」(“obtuseness”, HE, p. 184) であり、マーガレットとの「話し合い」の中でも、彼は彼女の意図することにまったく気付かない俗物でしかなかったのである。

この後、マーガレットとヘンリー（この段階で彼女はウィルコックス氏をヘンリーと呼び始めている）との結婚に至るまでにさらに深刻な事態が発生する。まず、レナードはヘンリーの忠告に従ってポーフォリオン火災保険会社を辞め、別の会社に移るが、そこでも人員整理の対象となりその会社を首になる。その前に、ポーフォリオン火災保険会社は倒産するかもしれないというヘンリーの情報は誤りだったことが判明するが、このことはレナードには全く知らされていない。レナードがどこかに勤め口を紹介してほしいとヘレンに頼みに来たため、彼女は彼の失職に責任を感じて、ヘンリーの娘、イーヴィーの結婚式が行われているシュロプシャーのオニトン・グレンジへレナードとジャッキーを連れて行く。彼女は、間違った情報を与えたヘンリーにはレナードに仕事を紹介

する義務があると考えていたからである。

オニトン・グレンジでヘンリーとジャッキーが顔を合わせたことにより、マーガレットにとってはショッキングな事実が明らかになる。それはジャッキーが10年前にヘンリーの情婦だったという事実である。そのことを知ったヘレンはレナードへの同情と階級的償いの気持ちから彼に身を任す。彼女は肉体的償いだけでレナードの困窮が解決するとは思わなかったので、自分の財産の約半分に当たる5,000ポンドを彼に与えることを決心し、その手続きを弟のティビーに託してドイツへ行ってしまう。

一方、ヘンリーの下劣な品性を思い知らされたマーガレットは彼から婚約を解消したいという申出を受ける。しかし、彼女は思い悩んだ末にヘンリーへの憐れみの気持ちから、彼の不品行を許し、二人の関係はこれまで通りだと告げて、結婚に踏み切る。ウィッカム・プレイスからの立ち退きの期限も刻々と迫って来たので、彼女は両親から受け継いだ家具類を空き家になっていたハワーズ・エンドの家に送り、ヘンリーと結婚した後は新居を建てることとして、それまでデューシー・ストリートの家で生活することに決める。彼女は結婚後はオニトン・グレンジを一生住む家にしたいと願っていたが、ヘンリーは彼女に何の相談もなくその屋敷を借家にしてしまっていた。二人は予定通りデューシー・ストリートの家を新居とし、穏やかな新婚生活に入る。

マーガレットとヘンリーの結婚は、この作品のエピグラフである「ただ結びつけよ」の実例であり、少なくともマーガレットにとってはこの結婚は相対立する価値観や文化を背景に持っている者の和合であると捉えられていることが示唆されている。彼女は「散文と情熱を結び合わせよ、そうすれば至高の愛が生まれるはずだ」と語り、それをヘンリーとの結婚への決意としている。しかし、この二者の和合はそう簡単には行かない。そもそもこの二人が結婚すること自体、何か腑に落ちない点がある。F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) が、“Nothing in the exhibition of Margaret’s or Henry Wilcox’s character makes the marriage credible or acceptable.”³⁰⁾と述べているように、読者がこの結婚を

「有り得ること」として納得するのに十分な性格描写がなされているとは言い難い。仮にマーガレットが婚期を逸した31歳のオールド・ミスであっても、彼女がヘンリーのような男との結婚を決意することは読者にとっては納得しがたいことに思えるのではないだろうか。

ヘンリーがマーガレットとの結婚を望んだ理由は、彼女が堅実な中産階級の人間が持つに相応しい「財産」だったからに他ならない。ゴールズワージー (John Galsworthy) の『財産家』 (*A Man of Property*, 1906) の主人公、ソームズ・フォーサイト (Soames Forsyte) が芸術的感受性に優れた美しい妻、アイリーン (Irene) を自分の「所有物」と考えていることと事情はほぼ同じである。それは結婚後のヘンリーの心境を説明している次の文章でも明らかにされている。

His affection for his present wife (=Margaret) grew steadily. Her cleverness gave him no trouble, and, indeed, he liked to see her reading poetry or something about social questions; it distinguished her from the wives of other men. He had only to call, and she clapped the book up and was ready to do what he wished. Then they would argue so jollily, and once or twice she had him in quite a tight corner, but as soon as he grew really serious she gave in. *Man is for war, woman for the recreation of the warrior*, but he does not dislike it if she makes a show of fight. (Italics mine. HE, p. 256)

ヘンリーにとってマーガレットは自分と同じ階級の男達の妻と比較しても、際だって賢く、魅力的な妻であった。彼の考えでは、男は実業の世界で戦う「兵士」であり、その妻は彼の「慰め」となる存在でなければならない。マーガレットはその役割を十二分に果たすことの出来る申し分のない妻であった。従って、ヘンリーにとっては、マーガレットとの結婚は「良い買い物」をしたことと同

義なのである。

一方、マーガレットの側からすれば、このようなヘンリーの考え方はとうてい是認できるものではなかったはずである。彼は、すでに述べたように、人間関係は財産関係の延長であると考える人物である。彼は10年前のジャッキーとの情事は外地で戦う兵士にはよくある過ちの一つに過ぎないと考えている。それが当時のウィルコックス夫人に対する裏切りになるなどという意識は全く持ち合わせていない。彼にとって、ただその不品行が家族や知人に知られさえしなければ、とりたてて問題にすべきことではなかったのである。彼が取り結ぶ人間関係には「誠意」と呼ぶことができるものは何もない。自分が与えた誤った情報によって一人の青年が失業し、路頭に迷うことになっても、それは人生の戦いに敗れた者の運命だ、と言って済ませることが出来るような冷酷な男である。彼が最も恐れていることは自分の体面に傷がつくことであり、自分の財産が失われることである。ヘレンが明確に指摘しているように、彼の本質は「恐怖と空虚」という一言で要約できるような人間である。それがマーガレットの人生観のどの基準にも達していないことは明らかである。にも拘わらず、彼女は「憐れみ」の気持ちから彼との結婚を決意した訳だから、リーヴィスでなくともこの結婚は理解しがたいと見なすしかない。

また、ヘレンとレナードとの関係についても納得の行く描写になっていると言いがたい。彼女もマーガレットと同じような人間観を持っている。彼女はマーガレットよりはるかに純粋で、かつ衝動的で感化を受けやすい女性である。レナードの窮状に同情し、彼の転落には階級的責任があると考えたヘレンは、彼に身を任せたばかりか、お金を与えてその償いをしようとする。彼女の行為が持ち前の正義感に基づくものであったとしても、彼女が果たしてそこまでの自己犠牲を払う必要があったのか、という問題が残る。フォースターの母親、リリーもこの作品の校正刷りを讀んだとき、ヘレンとレナードとの肉体関係と私生児誕生の経緯をどう理解すればよいのか分からなかったとのことである。フォースターの伝記作家の一人である F. キング (Francis King) も “For-

ster's treatment of Helen's seduction showed his pathetic inability to delineate any kind of sexual relationship between a man and a woman."³¹⁾ と述べて、男女の性関係を描写するときのフォースターのどうにもならない程の無能ぶりを指摘している。この問題にはフォースター自身の同性愛の性癖が大きく影響していると思われるが、この点については稿をを改めて議論することにした。

5

ヘレンとレナードとの一件があってから8ヶ月が過ぎるが、ヘレンはドイツへ行ったきりで、彼女の詳しい消息はマーガレットのところにも届かない。そのためにマーガレットはヘレンの安否が気になり始める。ヘレンがレナードに与える予定だった5,000ポンドは返送され、バスト夫妻は家賃不払いが原因で追い立てをくい、その後の居所は不明になる。この間に シュレーゲル一家が30年間住んでいたウィッカム・プレイスの家を取り壊され、家財道具は一時保管のためハワーズ・エンドの屋敷に送られる。マーガレットとヘンリーはサセックス州に新居を構える計画を立て、それが完成すれば現在住んでいるデューシー・ストリートの家を引き払い、そこで静かな生活を送ることにしていた。ところが、ハワーズ・エンド邸の管理を依頼されていたエイヴリー婆さん(Miss Avery)がシュレーゲル一家の荷物を開けてしまったというニュースが入る。マーガレットはエイヴリー婆さんの勝手な行動を止めさせるために、さっそくハワーズ・エンドへ急行する。しかし、シュレーゲル一家の家財道具のほとんどはすでにその屋敷内に据え付けられていた。彼女はエイヴリー婆さんに事情を説明し、もう一度荷造りをし直すことに決め、その日はハワーズ・エンドを後にする。

ちょうど、その頃マーガレットの叔母のマント夫人が急性肺炎にかかる。そこでマーガレットはヘレンを呼び戻すために手紙を送る。その返事が届く前にマント夫人は快方に向かう。しかし、そのことをヘレンに知らせる方法がない

ため、マーガレットは彼女からの連絡を待つしかなかった。やがて、ヘレンから返事が届くが、彼女のロンドンでの滞在先が明記されていないばかりか、銀行気付けで連絡をする方法しか示されていないかった。マーガレットはどうしても彼女の前に姿を現そうとしないヘレンの行動に不審感を抱き、何としてでも彼女に会わねばならないと考える。彼女は、ヘレンが「どうしても持ち帰りたい本が1, 2冊ある」と書いていたことを利用して、彼女をハワーズ・エンドに呼び寄せ、そこで待ち伏せをするというヘンリーの計画を受け入れる。ヘンリーとチャールズは、ヘレンが理解に苦しむような奇妙な行動に出ていることを知り、彼女はどこか気が違っているのではないかと疑い始めていた。マーガレットはそうした疑いを晴らすためにも、多少卑劣な手段であっても、ヘンリーの計画に従って、まずヘレンに再会することが先決だと判断していた。

8ヶ月ぶりにマーガレットの前に姿を現したヘレンを見て、彼女はヘレンがこれまで絶対に顔を見せようとしなかった理由を理解する。ヘレンは妊娠していたのである。彼女が身ごもっている子供の父親が誰なのかを詮索しようとするヘンリーを追い返したあと、マーガレットは事の次第をヘレンから聞き出そうとする。ヘレンは自分たちの家具に取り囲まれてハワーズ・エンドの屋敷で一泊し、姉妹水入らずで積もりつもった話をしたいと提案する。マーガレットはその許可を得るためにチャールズの家で待機していたヘンリーと話し合うが、彼は亡くなった妻や子供達の思い出が詰まっている屋敷に、私生児を身ごもったヘレンを宿泊させる訳には行かないとして、その申し出を認めようとしない。マーガレットはヘンリーの拒絶の理由を聞き、それまで心の奥底にしまい込んでいた彼女の本音を次のような齒に衣を着せぬ言葉でぶちまける。

Henry! You have had a mistress—I forgave you. My sister has a lover—you drive her from the house. Do you see the connection? Stupid, hypocritical, cruel—oh, contemptible!—a man who insults his wife when she's alive and cants with her memory when she's dead. A man who

ruins a woman for his pleasure, and casts her off to ruin other men. And gives bad financial advice, and then says he is not responsible. These men are you. You can't recognize them, because you cannot connect. I've had enough of your unweeded kindness. I've spoilt you long enough. All your life you have been spoilt. Mrs Wilcox spoiled you. No one has ever told you what you are—muddled, criminally muddled. Men like you use repentance as a blind, so don't repent. Only say to yourself: 'What Helen has done, I've done.' (HE, p. 305)

ヘンリーは自分も妻を裏切る卑劣な行動をとっていながら、同じような過ちを犯したヘレンを許そうとしない。彼は自分のしたことの道徳的意味が全く分かっていないだけでなく、それを棚に上げて何の責任も感じない木偶の棒であり、愚かな偽善者以外のなにものでもない。これがマーガレットの本音であり、ヘンリーの人間性に対する完全な否定だと言える。この痛烈な批判を投げつけられて、ヘンリーは何一つ反論することが出来なかった。マーガレットはヘンリーの身勝手さ、無責任、鈍感さをここで改めて確認し、ヘンリーとの決別もやむを得ないと判断する。再びヘレンが待つハワーズ・エンドの屋敷に引き返したマーガレットは、イーヴィーの結婚式の当日にヘレンとレナードとの間に何が起こったのか、その経緯を始め、その後の彼女の行動などについて詳しい話を聞く。

ハワーズ・エンドでこうした事態が進行している間に、もう一つ別の事態も新たな段階へと進展していた。ヘレンが身ごもった子供の父親であるレナードを巡る運命がそれである。彼は自分が父親になる可能性については全く知ることなく、この時にはすでに「貧困線」を飛び越えて乞食同然の生活を送っていた。レナードは、自分の妻のジャッキーを裏切り、ヘレンと姦通の罪を犯したことで、良心の呵責に悩んでいた。数日前にロンドンのセント・ポール寺院でたまたまマーガレットとティビーの姿を見かけたため、自分の道徳的過失を

マーガレットに告白し少しでもその罪悪感を軽減したいと考えていた。

彼はヘンリーの会社を訪ね、マーガレットの住所を知り、ジューシー・ストリートの家を訪問する。そのとき、彼女がハワーズ・エンドにいることを知らされ、彼も後を追うことにする。レナードはマーガレットとヘレンがハワーズ・エンド邸に泊した翌朝早く、そこに到着する。丁度その場に居合わせたチャールズは、ヘレンの姦通相手を懲らしめようとしてシュレーゲル姉妹の父親の持ち物であった剣でレナードを殴打する。その一撃で、レナードは心臓麻痺を起こして死んでしまう。この思いがけない成りゆきにヘンリーは気が動転して、その事態をどのように收拾すれば良いのか分からない状態に陥る。結局、チャールズは過失致死罪に問われ、懲役3年の刑に服することになる。このような結果になったことで、ヘンリーは有能な実業家としての状況判断能力も決断力もなくなってしまう、まるで「去勢」された動物のような人間になる。³²⁾

この後、物語は14ヶ月後のハワーズ・エンド邸の場面に変わる。すでにヘレンが産んだレナードの子供は1歳になっている。シュレーゲル姉妹はその子供とヘンリーとともにハワーズ・エンド邸で落ち着いた生活を送っている。ヘンリーは形の上ではハワーズ・エンド邸の主人であるが、実際の主導権はマーガレットが握っている。つまり彼女は第一のウィルコックス夫人の後継者になったのである。ヘンリーはまだ刑期の残っているチャールズを除くウィルコックス一族を集めて家族会議を開く。その会議の結論として、ヘンリーはハワーズ・エンドの屋敷はマーガレットが遺産として受け継ぐこと、そしてマーガレットが死亡したあとはヘレンの子供がこの屋敷を受け継ぐことを宣言する。この時初めてマーガレットは第一のウィルコックス夫人が亡くなる直前に「ハワーズ・エンドの屋敷をマーガレットに受け継いでもらいたい」と書いた「遺書」が存在していたことを知る。

6

『ハワーズ・エンド邸』を読み終えた多くの読者は、正直なところ、一体この

作品の核心がどこにあったのか、考え込むことになるのではないだろうか。というのも、これまで検討してきたように、この作品は「英国の現状問題」を扱った小説であるはずだが、同時代の大事件であったボーア戦争に関しては一行も出てこないし、婦人参政権、労働者階級の実状などについてもほとんど触れられていないからである。「貧困」の問題についても、レナードの「極貧」への転落が描かれているだけである。

しかし、「都市文明」については、フォースターも深刻に受けとめていたようであり、チャールズの自動車にまつわるエピソードや「赤錆」の比喻を使った巧みな描写を通じて真剣に取り組む姿勢を見せている。しかしながら、彼自身、大きな歴史の流れとしての「都市化」についての理解は観念的なレベルに留まっており、その実態については十分に把握していたとは言えない。それゆえに『ハワーズ・エンド邸』においては「消えゆくイングランドの田園」という側面が強調される結果になっている。その象徴がハワーズ・エンドの屋敷であることはすでに指摘した通りである。

ハワーズ・エンド邸の精神的なレベルでの後継者はマーガレットであるが、彼女は第一のウィルコックス夫人から「英国の魂」を受け継いだだけでなく、この屋敷を「英国的な生活」を営む「家庭」として蘇らせる役目をも受け継いでいる。財産としての「家」ではなく、安息の場としての「家」に対する彼女の執着は、イーヴィーの結婚式に参列するために訪れたオニトン・グレンジへの思いにも現れている。彼女はヘンリーと結婚した後は、この土地の人々と交流し、そこに根を下ろして生活し、この「土地の霊」と一体化した生活を送ることを夢見ていたからである。シュレーゲル一家が長年住み慣れたウィッカム・プレイスの家から立ち退かざるを得なくなった時にも、彼女は、現代の家財道具の所有者は昔の「遊牧民族」の時代に逆戻りしているのではないか(HE, p. 146)という感慨を述べている。彼女の土地や家に対する執着は、作者自身の「土地と家」に対する執着でもあったようだ。

この問題について納得の行く説明を与えてくれているのは『モーガン』(Mor-

gan: A Biography of E. M. Forster, 1993) を書いた N. ボーマン (N. Beauman) である。彼女はこの伝記の全三十章の標題に家と土地の名前を選んでいる。彼女は、フォースターの生涯は永遠の住処を求めての旅であったという視点を導入して、小説家 E. M. フォースターの実像を浮き彫りにしようとしている。彼女の主張に耳を傾けながら改めてフォースターの住んだ場所をたどってみると、彼は結局のところ永遠の住処と呼ばれる「家」に腰を落ち着けることが出来ていない。彼はメルコウム・プレイス (Melcombe Place) で誕生しているが、そのあと4歳から14歳までの子供時代をハーフォードシャーの「ルークスネスト」(Rooksnest) と呼ばれる家で過ごしている。この「ルークスネスト」こそ『ハワーズ・エンド邸』の舞台となっている屋敷なのである。彼の主な住所を列挙すれば以下のようなになる。

1. 6 Melcombe Place (1879-83)
2. Rooksnest" in Hertfordshire (1883-93)
3. Dryhurst" in Tonbridge (1893-98)
4. Tunbridge Wells (1898-1901)
5. Hotels in Italy (1901-02)
6. Maimie's House on Milford Hill, Salisbury, Wiltshire (1902-03)
7. A flat at 11 Drayton Court in South Kensington, London (March to September, 1904)
8. "Harnham" in Weybridge (1904-24)
9. "West Hackhurst" in Abinger Hammer, Surrey (1924-46)
10. King's College, Cambridge (1946-70)

フォースターの主要な長編小説は上記の中の「ハーナム」で書かれており、また『インドへの道』以降の社会批評や文学論などは「ウエスト・ハックハースト」に住んでいた時に書かれている。しかし、彼が心の安らぎを得ることがで

きた、いわば魂の故郷としての「家」は「ルークスネスト」だったようだ。彼は魂の故郷としての「ルークスネスト」への思いを込めて『ハワーズ・エンド邸』を書き上げ、その後も何度かこの家を訪れている。マーガレットがこの作品の中で「家」への執着を示しているのは彼自身が「ホーム」と呼べる家を持てなかったこと、言い換えれば彼自身が持っていた「家の喪失」感に由来しているというボーマンの主張にはかなりの説得力があると言える。³³⁾

さて再び『ハワーズ・エンド邸』におけるフォースターの時代状況への取り組みの問題に戻る。トリリングが指摘しているように、この作品は「英国の運命」を扱った小説であり、その運命はハワーズ・エンド邸という一つの屋敷に集約する形で描かれている。物語全体としては、大きな変化を顕在化させつつあったヴィクトリア朝からエドワード朝への移行という時代状況の中で、中産階級の人々がどのような位置にあり、彼らはどのように生きるべきかを示唆しようとした作品となっている。作者は、中産階級の中にも多様な価値観を持つ人々が存在し、彼らがどのような人間関係を形成し、どの方向に向かって進んで行こうとしているのかを明らかにすることに焦点を絞っている。その様なテーマを担う中心人物はすべて中産階級の間人であり、貴族も労働者階級の間人もこの作品には登場していない。それゆえ、フォースターにとっては、「英国の現状問題」とは中産階級が直面している問題であり、彼はこの階級こそが英国そのものを代表していると信じていたと言える。

この中産階級が継承し、守って行くべき至高の価値とは英国の「田舎」、「田園生活」、それに加えて魂の安らぎの場としての「家」なのである。都市文明は次第に田園生活を浸食し、商業主義は芸術や文化を貶め、ヒューマニズムに根ざす人間関係をお金やモノで交換出来る関係へと歪めて行く。そうした変化は、『ハワーズ・エンド邸』ではウィルコックス的価値観とシュレーゲル的価値観の対立、抗争として描かれている。この構図の中心にハワーズ・エンドの屋敷がある。マーガレットが初めてこの屋敷を訪れた時の言葉、すなわち「この屋敷はイギリスの屋敷であり、この楡の巨木はイギリスの木である」(HE, p. 203)

を参照するまでもなく、ハワーズ・エンド邸はまさに英国そのものの象徴となっている。

そのハワーズ・エンド邸はヘンリーやチャールズのような商業主義精神の持ち主や都市文明の側に立つ人間が持つには相応しくない屋敷である。³⁴⁾ 物語の結末では、作者自身もその一員である知識階級に属するマーガレットがこの屋敷を受け継ぐことになっている。しかし、実は彼女にもこれを受け継ぐ資格はなさそうである。というのも、彼女たちの存在はウィルコックス一族のような実業家達の「経済力」に支えられているからである。また、マーガレットの後にこの屋敷を受け継ぐことになるヘレンの子供は明確な所属階級を持たない人間として成長することになる。この子供が果たしてハワーズ・エンド邸を継承する資格があるのかどうかについては明言されていない。それは、トリリングも示唆しているように、あくまでも作者の「一つの希望」³⁵⁾ として提示されていると理解するしかないようである。

フォースターは、他のエドワード朝の知識人達と同じように、大きな時代の変化に戸惑い、混乱を来しながらも、新しい時代のあるべき秩序を模索しているが、結局のところ、新しいヴィジョンを提示するには至らなかった。しかし、大きな歴史の流れの中でこれまで「英国性」を保持してきたカントリー・ハウスの生活様式や伝統、それに付随する古き良きイングランドの風習の衰退を彼は鋭敏に感じ取っていた。その上で彼は、「英国性」はある特定の階級が受け継ぐものではなく、階級間の「結びつき」の中でその連続性を保つことにならざるを得ないという結論に達していたと言える。

マーガレットは、ヘンリーとの結婚についてヘレンの同意を得ようとしている場面で、つぎのような考えを示している。

The businessman who assumes that this life is everything, and the mystic who asserts that it is nothing, fail, on this side and on that, to hit the truth. "Yes, I see, dear; it's about halfway between," Aunt Juley had

hazarded in earlier years. No; truth, being alive, was not halfway between anything. It was only to be found by *continuous excursions into either realm*, and, though *proportion is the final secret*, to espouse it at the outset is to ensure sterility.

(Italics mine. HE, p. 192)

この文章で明らかにされていることは、「真実」というものは、実業家の側とか神秘主義者の側といった両極端のどちらか一方にあるとする考え方も、あるいはその中間当たりにあるとする考え方も間違っている。「真実」は生きているものだから、人間が両方の世界を行き来することによってのみ見いだされるはずだ。このマーガレットの考え方はフォースター自身の考え方を代弁したものである。断絶した二つの世界のどちらか一方の側にしか「真実」は見い出せないとする見方や、どちらか一方が他方を支配したり、吸収したりするといった関係ではなく、ある時は相手に身を任せ、ある時は強固に自己を主張するといった均衡のとれた関係を築くこと、これがこの作品のテーマである「理想的な結びつき」の意味なのである。ここにフォースターの自由主義的思想の真髓を見い出すことが出来る。このような考え方は、極端を避け中庸を重んじると言われている英国中産階級の大多数の『ハワーズ・エンド邸』の読者には快く受け入れられたはずである。

D. ジャーヴィスは『文学的イングランド』の中で、エドワード・トーマス (Edward Thomas), E. M. フォースターとD. H. ロレンス, F. R. リーヴィスとT. S. エリオット, G. スタート (George Sturt), G. オーウェルとE. ウォー (Evelyn Waugh), ベッチマン (Betjeman) とラーキン (Larkin), それに G. ヒル (Geoffrey Hill) など著名な20世紀の詩人、小説家、批評家たちの抱いていた「英国性」に関する意識が彼らの作品にどのように反映されているのかを検討している。彼は、フォースターとロレンスを扱った第3章で『ハワーズ・エンド邸』に言及し、その創作動機とこの作品が提起している問題について次のように述

べている。

He (=Forster) at least realised that other Englands existed than those of which he knew himself. Hence the curiously conjectural character of the Wilcoxes and their business world in *Howards End*. The novel must have originated in its author's need to enlarge his understanding of what England was. The problem it begins from is whether the Wilcoxes and the intellectual Schlegels can ever learn to 'connect'. Because we tend to see this problem through Schlegel eyes we are inevitably made hyperconscious of how wide the rift between the two families is.³⁶⁾

フォースターの創作動機が彼自身の英国の対する認識を深めようとすることにあり、またこの作品のテーマが「結びつけること」にあるというジャーヴィスの理解はトリリング等と同じである。しかし、残念ながらフォースターは読者の注意を中産階級内の裂け目に向けさせることには成功しているが、中産階級と労働者階級との間の裂け目については目を瞑ってしまっている。また同じ中産階級内に見られる亀裂の一方の側に位置するウィルコックス一族の実態については、あくまでシュレーゲル姉妹の立場で観察されたものであり、公平な描写になっているとは言えない。ジャーヴィスがここで指摘しているように、フォースターが彼自身のイメージに適合した「英国」を選択したことは同時にそれ以外の「英国」を排除したことになるのである。³⁷⁾

「全体としての英国」の継承のためには、特定の階級、または一部の人間のための「英国」は排除するという方法ではなく、一方が存在するためには他方の存在を必要とするという「関係性」においてこれを実現して行くべきであろう。このことを読者に理解させようとする事がここでは求められているはずである。しかしながら、作者のその意図が伝わるのは結局中産階級の読者だけに限られてしまう。「結びつける」ことの必要性およびその重要性についての作者

の意図は、たとえそれが「予言的」な形で示されていても十分に理解可能である。しかしそのことを十分に汲み取ることが出来る読者は結局のところ中産階級に属する「意図された読者」でしかないという点も見逃す訳には行かない。この点がフォースターの持つ「英国性」の特質であり、同時に彼の限界でもあったと言えるだろう。

(本稿は平成8～9年度松山大学国外研究制度による研究成果の一部である。)

注

- 1) Cf. Philip Gardner (ed.), *E. M. Forster : The Critical Heritage* (London : Routledge & Kegan Paul, 1973), pp. 123-167. 以下は本書から抜粋した *Howards End* に対する賞賛の言葉である : “a novel of high quality” (*Manchester Guardian*, 26 October 1910), “he (= E. M. Forster) has written a book in which his highly original talent has found full and ripe expression (*The Times Literary Supplement*, 27 October 1910), “The Year’s best novel” (*Daily News*, 7 November 1910), “*Howards End* is a riper work altogether, and raises its author to a place among contemporary novelists” (*Daily Mail*, 17 November 1910), “it (= *Howards End*) remains quite one of the most remarkable novels of the year” (*Westminster Gazette*, 19 November 1910), “This novel (= *Howards End*) assures its author a place amongst the handful of living writers who count” (*Athenaeum*, 3 December 1910) etc.

また Virginia Woolf は “In *Howards End* there are, one feels, in solution all the qualities that are needed to make a masterpiece. The characters are extremely real to us. The ordering of the story is masterly.” (*Atlantic Monthly*, November 1927) と述べて *Howards End* を高く評価している。

さらに L. Trilling は “*Howards End* is undoubtedly Forster’s masterpiece ; it develops to their full the themes and attitudes of the early books and throw back upon them a new and enhancing light.” (Lionel Trilling, *E. M. Forster* [London : The Hogarth Press, 1944 ; The new and revised edition, 1969] , p. 99) と述べて、この作品を Forster の最高傑作だとして高く評価している。

- 2) John Colmer, *E. M. Forster : The Personal Voice* (London : Routledge & Kegan Paul, 1975), p. 22. あるいは, Alistair M. Duckworth, *Howards End : E. M. Forster’s House of Fiction* (New York : Twayne Publishers, 1992), p. 16 を参照されたい。
- 3) Virginia Woolf は, “Mr. Forster is extremely susceptible to the influence of time.”

(Philip Gardner [ed.] , *E. M. Forster : The Critical Heritage* [London: Routledge & Kegan Paul, 1973] , p. 320)と述べてForsterが時代の変化に敏感であったことを指摘している。

4) Jefferson Hunter, *Edwardian Fiction* (Cambridge, Massachusetts: Harvard U. P., 1982), p. 3. および, Donald Read, *Edwardian England 1901-15 : Society and Politics* (London: Harrap, 1972), p. 1 を参照。

5) John Colmer, *op. cit.*, p. 88.

6) *Ibid.*

7) Cf. John Colmer, *op. cit.*, p. 85. あるいは本稿の注2)や, F. R. Leavis, *The Common Pursuit* (London: Chatto & Windus, 1965), p. 268などを参照。またForster自身も*Howards End*について次のように述べている: “*Howards End* my best novel and approaching a good novel. Very elaborate and all pervading plot that is seldom tiresome or forced, range of characters, social sense, wit, wisdom, colour. Have only just discovered why I don’t care for it: not a single character in it for whom I care. . . . I feel pride in the achievement, but cannot love it, and occasionally the swish of the skirts and the non-sexual embraces irritate. Perhaps too I am more hedonistic than I was, and resent not being caused pleasure personally. —May 1958” (E. M. Forster, *Commonplace Book* ed. Philip Gardner [Aldershot, Hampshire: Wildwood House, c 1988] , pp. 203-4)

8) Lionel Trilling, *op. cit.*, p. 102.

9) E. M. Forster, *Howards End* (London: Hodder & Stoughton in association with Edward Arnold, c 1973), pp. 11-2.

以下同書からの引用は本文中にそのabbreviationと頁数を括弧にいれて, (HE, pp. 11-2) のように示す。

10) Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster* (London: Oxford U. P., 1966), p. 246. および, F. R. Leavis, *The Common Pursuit* (London: Chatto & Windus, 1965), p. 269を参照せよ。

11) Cf. Oliver Stallybrass, “Editor’s Introduction” to *Howards End* (Penguin Books, c 1989), p. 9.

12) Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster*, (London: Oxford U. P., 1966) p. 239.

13) Lionel Trilling, *op. cit.* p. 102.

14) *Ibid.*

15) *Ibid.* N. Beaumanによれば, 彼女達の「堅実な生活を保証するに十分な収入」が*Howards End* の初稿では1,200 ポンドになっていたとのことである。

- Cf. Nicola Beauman, *Morgan: A Biography of E. M. Forster* (London: Hodder and Stoughton, 1993; Sceptre edition 1994), p. 157.
- 16) Peter Laslett, *The World We Have Lost—Further Explored*: (London: Methuen, 1965; Third Edition 1983), pp. 261-4.
 - 17) Ibid., p. 246 & p. 252. また, C. F. G. Masterman, “Preface” to *The Heart of the Empire* (London: T. Fisher Unwin, 1901), p. vi も参照されたい。
 - 18) Peter Laslett, *op. cit.*, p. 249.
 - 19) Donald Read, *Edwardian England 1901-15* (London: Harrap, 1972), pp. 26-7.
 - 20) Cf. John Colmer, *op. cit.*, p. 87.
 - 21) Ibid. Colmer は Forster が Masterman の *From the Abyss* を読んでいた可能性が高いと推測している。
 - 22) C. F. G. Masterman, “Preface” to *The Heart of the Empire* (London: T. Fisher Unwin, 1901), p. viii.
 - 23) C. F. G. Masterman, *The Condition of England* (London: Methuen, 1909), p. 1.
 - 24) Ibid., p. vi.
 - 25) John Colmer, *op. cit.*, p. 85.
 - 26) Ibid., p. 88.
 - 27) Ibid., p. 89.
 - 28) Ibid., p. 97.
 - 29) Ibid., p. 101.
 - 30) F. R. Leavis, *op. cit.*, p. 269.
 - 31) Francis King, *E. M. Forster* (London: Thames and Hudson, c. 1978), p. 47.
 - 32) Lionel Trilling, *op. cit.*, p. 116.
 - 33) Nicola Beauman, *Morgan: A Biography of E. M. Forster* (London: Hodder & Stoughton, 1993; Sceptre edition, 1994), p. 4-5.
 - 34) 歴史家の Martin Wiener は *Howards End* における農村的生活様式と実業家ウィルコックスの特性について次のように述べている: “In his novel *Howards End* (1910), Forster celebrated Little England, whose heart lay in the countryside. The old country house of Howards End embodied the historic continuity of England, menaced by the ‘inner darkness in high places that comes with a commercial age’ in the persons of an Imperialist business family, the Wilcoxes.” Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980* (Cambridge: Cambridge U. P., 1981), pp. 61-2.
 - 35) Lionel Trilling, *op. cit.*, p. 116.
 - 36) David Gervais, *Literary Englands: Versions of ‘Englishness’ in Modern Writing*

(Cambridge: Cambridge U. P., 1993), pp 70-71.

37) *Ibid.*, p. 74, p. 75.

参考文献

I. Works by E. M. Forster :

1. *Howards End*. London: Hodder & Stoughton in association with Edward Arnold, c 1973.
2. *Goldsworthy Lowes Dickinson*. London: Edward Arnold & Co. 1934.
3. *Selected Letters of E. M. Forster* Vols. I & II. Edited by Lago, Mary & Furbank, P. N. London: Collins, 1983.
4. *Commonplace Book*. Edited by Philip Gardner. Aldershot, Hampshire: Wildwood House, 1988.

II. Biography and Social Backgrounds :

1. Furbank, P. N. *E. M. Forster : A Life* Vols I & II. London: Secker & Warburg, 1977.
2. King, Francis. *E. M. Forster*. London: Thames and Hudson, c 1978.
3. Beauman, Nicola. *Morgan : A Biography of E. M. Forster*. London: Hodder & Stoughton, 1993 ; Sceptre edition, 1994.
4. Masterman, C. F. G. ed. *The Heart of the Empire*. London: T. Fisher Unwin, 1901.
5. _____. *The Condition of England*. London: Methuen, 1909.
6. _____. *England After War : A Study*. London: Hodder & Stoughton, 1923.
7. Read, Donald. *Edwardian England 1901-15 : Society and Politics* London: Harrap, 1972.
8. Wiener, Martin J. *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*. Cambridge: Cambridge U. P., 1981.

III. Critical Works :

1. Trilling, Lionel. *E. M. Forster*. London: Hogarth Press, 1944 ; The new and revised edition, 1969.
2. Leavis, F. R. *The Common Pursuit*. London: Chatto & Windus, 1965.
3. Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster*. London: Oxford U. P., 1966.

4. Gardner, Philip. ed. *E. M. Forster : The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul, 1973.
5. Colmer, John. ed. *E. M. Forster : The Personal Voice*. London : Routledge & Kegan Paul, 1975.
6. McDowell, Frederick P. W. *E. M. Forster : An Annotated Bibliography of Writings about him*. De Kalb, Illinois : Northern Illinois U. P. 1976.
7. Das, G. K. & Beer, John. eds. *E. M. Forster : A Human Exploration, Centenary Essays*. London : Macmillan, 1979.
8. Hunter, Jefferson. *Edwardian Fiction*. Cambridge, Massachusetts : Harvard U. P., 1982.
9. Duckworth, Alistair M. *Howards End : E. M. Forster's House of Fiction*. New York : Twayne Publishers, 1992.
10. Gervais, David. *Literary Englands : Versions of 'Englishness' in Modern Writing*. Cambridge : Cambridge U. P., 1993.